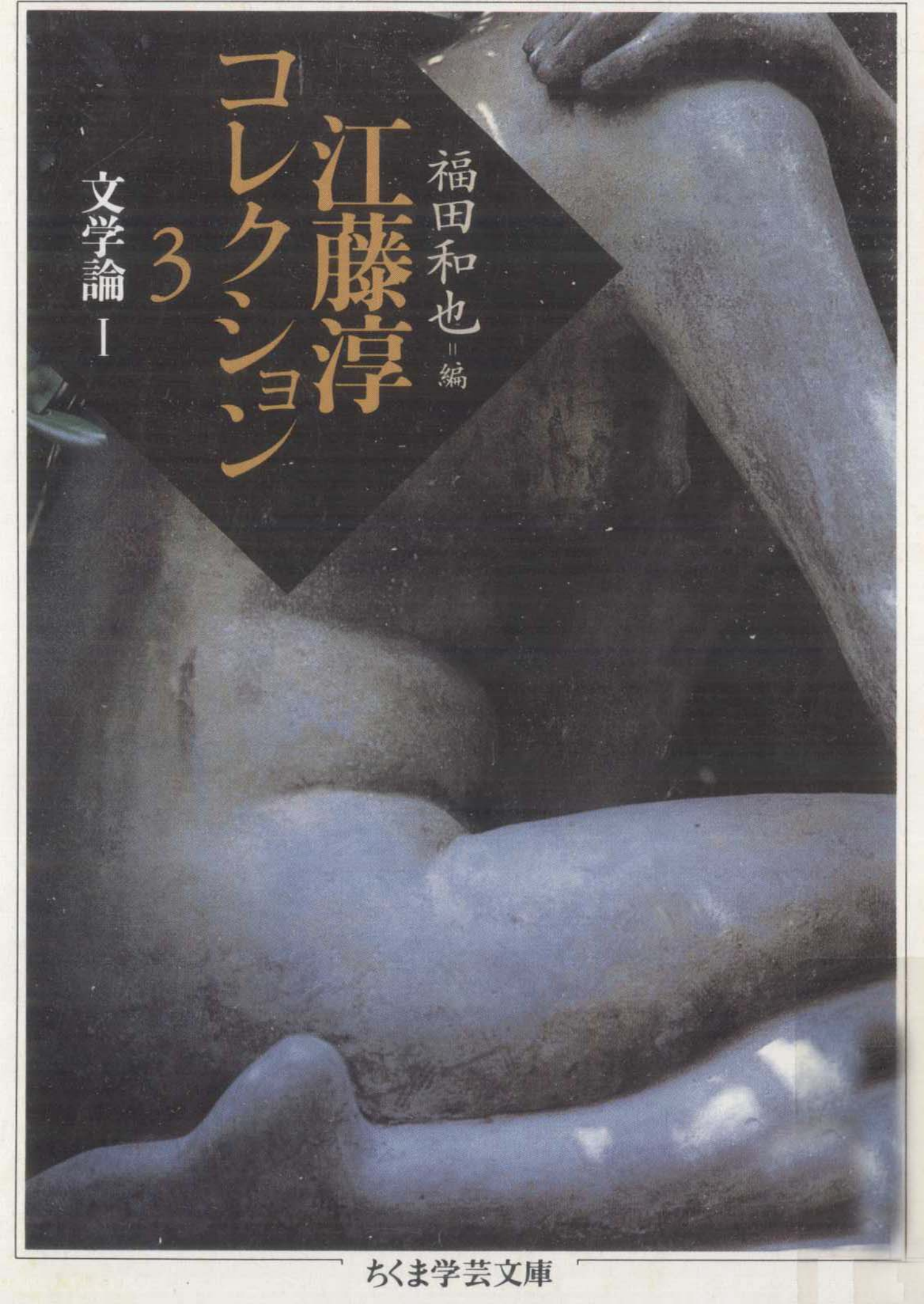




福田和也 編

江藤淳
コレクション

3

文学論 I



ちくま学芸文庫

江藤淳コレクション3 文学論I

二〇〇一年九月十日 第一刷発行

著者 江藤 淳（えとう・じゅん）

編者 福田和也（ふくだ・かずや）

発行者 菊池明郎

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二―五―三 ㊟ 二一―一八七五五

振替〇〇―一六〇―八―四二二三

装幀者 安野光雅

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社鈴木製本所

ちくま学芸文庫の定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。

筑摩書房サービスセンター

埼玉県さいたま市櫛引町二―六〇四 ㊟ 三三―一八五〇七

電話番号 〇四八―六五一―〇〇五三

© NORIKO FUKAWA 2001 Printed in Japan

ISBN4-480-08653-6 C0195

法學芸文庫

江藤淳コレクション 3

文学論I

福田和也 編

永井荷風論 ある遁走者の生涯について

256

石原慎太郎論

308

三島由紀夫の家

352

ヒットラーのうしろ姿

373

大江健三郎の問題

380

∴

なつかしい本の話(抄)

399

『谷崎潤一郎集』

400

高浜虚子 『風流懺法』 『道』

414

伊藤静雄 『反響』

429

チエーホフ 『退屈な話』

444

目次

マンスフィールド覚書 「園遊会」をめぐって

10

∴

奴隷の思想を排す

34

作家は行動する(抄)

95

青春の荒廃について

235

∴

自由と禁忌（抄）

453

裏声文学と地声文学

454

制度としての文学

493

地理のない歴史

529

初出一覧

564

解題 三

福田和也

566

江藤淳コレクション3 文学論I

∴

マンスフィールド覚書 「園遊会」をめぐって

——諸君は文学作品や芸術作品について考えるが、それは作者の知性の広さや限界を計るためである。……語の選択、文の長短、暗喩の性格、詩句の韻律、一つとして作者の象徴たらざるはない。

あの energetic なイポリット・テーヌがこういった時、彼はこの方法の持つ暴力のことを考えていただろうか。ぼくらが「評価」や「位置づけ」の本能的にいたものを持つかぎり、こういった独断は多かれ少かれ魅力的である。しかし、ここにはいくらか偏執的なものがありはせぬか。それが「知性の広さ」に物尺をあてねば気の済まぬ実証主義者テーヌの目である、といつてもよからう。実証すべき対象があるというより、実証せずにはいられぬ実証主義者がいるのである。テーヌの目は科学者のそれであつた。そして彼の用いた素材は文学であつた。さきほど、ぼくが暴力といったのは、このひずみに対

してである。

むしろぼくらは好奇心から作者に近づく、といった方がよい。平凡な読者はそんな風にするものである。面白い本を読めば、これを書いた人間が、どこに住み、どんな暮らしをし、何で食っていたかということを知りたがらぬ読者はあまりいない。そして作品の中に表れたドラマ以上に、作者と作品との間で演じられるドラマが深刻であるような場合、そこに極く素朴な批評の介入する間隙が生れる。これは、テーヌの大上段にふりかぶった「方法」のようなものでは全くない。ぼくらは「実証」するためによりは、「共感」しながら小説を読む場合の方がはるかに多いのである。

キャサリン・マンズフィールドは素朴な作家である。G・S・フレイザーは彼女の作品を淡彩の風景画にたとえる。しかし先刻の頭れざる内奥のドラマに関する限り、彼女は決して素朴でもなければ、単純な水彩画家でもない。……最もcasualな外貌を持った作品ですら、彼女はそれを生と死の割れ目から生み出していたのだ。マンズフィールドがぼくらの興味をひくのは、この点に於てである。

キャサリン・マンズフィールドは、遂に一篇の長篇小説も書かなかった。一九一六年一月の日記に「長篇小説や、問題小説や、素朴率直でないものは一切書くまい」とあるにしてもこれは彼女がこの形式を好まなかったからでは決してない。現に幾度か長篇の計画は

なされていて、そのうち的一篇は“Karori”と呼ばれるはずであつた。現在、短篇の形で残されている「入江のほとり」と「前奏曲」は、この作品の一部として書かれたのである。だが、ともあれ、彼女は一つの長篇を書くことも出来なかつた。ここにいわば彼女の作家としての致命的な弱点がある。

大体、短篇作家は人生からほんの少し丈離れていなければならぬ。短篇小説を可能にするのはこの距離である。丁度、絵を見る時、ぼくらが一定の間隔を必要とするように。

——作家はかならずしも小説の中の人生を生きなくてもよい。いや、切断し批評する丈の鋭利さが——或は愛撫し嘆賞する丈の共感する心がありさえすればよい。必要なのはカンヴァスがそれをほめこむ額縁であつて、作品自体からじかにぼくらの感じとる生の感覚ではないのである。これは極めて重要な点だが、一体作家が人生から一步退くのであるか、人生が稀薄になつて作家から遠のいて行くのであるか？

マンスフィールドの場合は明らかに後者の場合であつた。その点で彼女はチェーホフと違う。かりに彼女のチェーホフ模倣がしばしば非難されるように意識的なものであつたにせよ、それは、極く外面的なスタイルや発想の面にとどまつている。彼女はチェーホフを剽窃するにはあまりに独自の資質を持ちすぎていた。そしてチェーホフ模倣から自由であるためにはあまりに職業作家的な、あゝの強さがなすぎた。がいして、ぼくらは、キャサリン・マンスフィールドが「可愛い女」の作家よりはるかに不幸であつたといえる。何故

なら彼女は先ず自分を「作家」にするために苦しまねばならなかったからである。

マンスフィールドにとって、人生を稀薄なものにしたのは一つには病気だったが、一つには彼女がニュージラランド生れだという事実である。そして病気からは「死」のテーマが生れ——これは幾度も変奏されながらあらゆる作品に投影されている——ニュージラランドに生れ、少女時代に英本国にやって来て、そのまま、二度と故郷を見ることのなかったその経歴から「過ぎ去ったものへの狂おしい渴望」が生れた。（彼女は、三つ目の短篇集「園遊会」の巻頭に Montaigne dit que les hommes vont béant aux choses futures; j'ai la manie de béer aux choses passés. と書いた。）

「死」を自らの中に発見したものにとって「生」はしばしば限りなくその重量を失って行くかのように見える。しかし彼女が「死」に触れるのは「生」を通じて以外ではない。ここに彼女は作家としての唯一の存在理由を見出す。

審美家キャサリン・マンスフィールドは、こうして誕生するのである。

彼女は、夫 J・M・マリにあてた手紙の中でこう書いた。

《今、私達は私達の正体を知っています。或る点からいえばそれは悲劇的な知識です。あたかも私達が再び甦っている間も死に当面しているようなものです。しかし生を通じて、

これが肝心な点です。私達は今開花したばかりの花に死を見るのと同様に生に死を見ます。私達の讃歌はその花の美に捧げられるべきものです。私達は知っている故に、その美を不死にしようと望みます。あなたもこのようにお感じになるでしょうか——それとも違った風に——どんな風に？》

今開いたばかりの花に死を見出してしまふものの目には、人生はいつも陰影を帯びた美しい絵でしかない。倫理、政治、社会——それら人間の造り出した約束事は彼女の視野から消失する。そして芝居の書割のように美しい空を背景にした輝かしい舞台が出現する。

《ああ、何てうつとりするようなだろう！ 何て楽しいんだろう！ ここに坐つて、それらすべてを眺めているのは、何てすてきだろう！ それはまるで芝居のようだった。全く芝居のようだった。あの空が書割でないなんて誰にいえるだろう？ 小さな茶色の犬がしかつめらしい足どりゆつくり歩いて来た。まるで芝居の犬みたいだ。とその瞬間ミス・ブリルはこの情景をこんなに浮き浮きしたものにしているのが何であるかに気づいたのだった。公園にいる人達は、みんな舞台にいるのだった。彼等は観衆であるばかりではなかった。眺めている丈ではなくて芝居を演じているのだった。彼女でさえも一役演じに毎日曜日や

つて来ているのだ。』

こうした創作態度ほど、例えばディッケンズのそれとほど遠いものはない。

『おお作家になること！ それに身を捧げた真の作家になること！ おお私は今日だめだった。……ディッケンズがこの創造の魔にとりつかれる瞬間がある。彼はわれを忘れてしまふ。あれは至上の幸福だ。こういう幸福を今日の作家はきつと持たないだろう。チードルの死——夜の一端に現れる曙。作者の気分と、作者はいわば自分自身のために書いたのだが、それは、彼の意志ではなかったということがはつきり判る。彼自身がやって来る曙になっており、彼自身が法廷に出る医師になっていたのだ。』

「だめ」だったのは、この日記の書かれた一九二〇年二月のある日丈のことではない。彼女には決して「我を忘れて創造の魔にとりつかれる瞬間」はやって来なかった。忘れるには明瞭すぎる程に死を胎んでいる自分を意識しつづけねばならなかったからである。

チボードがいったように、長篇作家は、あまり組立て、整頓し、端麗なフォルムを造り上げる欲望に寛容であつてはならない。彼は支配者ではない。自分で勝手に生きて動き出す作中人物にひきずりまわされながら書くのである。こうして、長篇小説——roman——